

# Chaucer における再帰動詞について

福元智子

## 1. はじめに

現代英語において、目的語に再帰代名詞を伴う動詞は再帰動詞と呼ばれている。古英語・中英語では *self* と複合しない人称代名詞も再帰代名詞としての機能を果たしており、人称代名詞を単独で用いる場合と、それに *self* が結合する場合のどちらもが再帰動詞と共起することが可能であった。1 つの動詞が 2 通りの再帰代名詞をそれぞれ従える例として、Chaucer の『カンタベリー物語』から以下に引用する。

- (1) That nedes cost he moot *hymselfen hyde*<sup>1</sup> (CT<sup>2</sup>, I 1478; 著者強調)
- (2) That in that grove he wolde *hym hyde* al day (CT, I 1481; 著者強調)

用例(1)においては、人称代名詞に *self* が添加されている(以下、「複合形」)。一方、用例(2)では、動詞 *hyde* が *self* を伴わない人称代名詞(以下、「単純形」)と共起している。

本研究の目的は、中英語期にみられるこれらの用法について再帰代名詞と共起している再帰動詞の頻度調査を行い、Chaucer においてどちらの再帰代名詞が再帰動詞と共起しているかを考察することである。また、再帰動詞を意味的観点から考察することで、再帰代名詞と共起している動詞にはどのような特徴がみられるかを分析する。本研究では、14 世紀後半に書かれた Chaucer の『公爵夫人の書』と『鳥たちの議会』をデータとして扱う。

次に、研究方法として、再帰代名詞を目的語にとる動詞の用例を Chaucer のコンコーダンスから収集し、それらを形態的、意味的観点から分析する。その際に再帰代名詞が主語や目的語の同格として機能する場合や前置詞の直後に位置する用例は除外した。

---

<sup>1</sup> 引用はすべて Benson (2008) からである。

<sup>2</sup> CT は、*The Canterbury Tales* の略である。

再帰用法は、これまで再帰動詞に共通してみられる意味の特徴について先行研究がなされているが、再帰動詞の意味特徴に加え、再帰代名詞の形態との関係性についても議論の余地があると考ええる。また、動詞の意味別の頻度についてもこれまであまり言及されていない。したがって、本研究では再帰代名詞と共起する動詞を意味により分類した上で、それらの使用頻度についても明らかにする。さらに、それらを『カンタベリー物語』における頻度や動詞の意味と比較し、Chaucerにおける再帰代名詞の形態と動詞の意味特性、さらに動詞の統語機能との関連性についても考察を行う。

## 2. 先行研究

2節では、2.1節で再帰代名詞の歴史的経緯、2.2節で動詞の意味特性と統語的特徴の関連性について先行研究を概観する。

### 2.1. 再帰代名詞の歴史的経緯

再帰代名詞の形態的側面について、古英語期には人称代名詞の単純形が再帰代名詞として用いられていた。しかし、強意を示すために名詞や代名詞の後に形容詞の *self* を加えることもあったと Curme (1931: 515) は述べている。また、Visser (1963: §426) は、強調の機能を果たしていた *self* が、その後徐々に重要性を増していったと主張している。

次に、再帰代名詞の頻度について、Visser (1963: §454) は、古英語期には単純形が再帰代名詞として優勢であったことを指摘している。また、Brunner (1973: 112) は、15世紀半ばまでには複合形が再帰代名詞として機能し始めたと言及している。Ogura (1989b: 50-1) は、古英語期と中英語期の作品における再帰用法について調査を行っている。それらの結果として、中英語期のいくつかの作品において単純形が依然として優勢であるものの、Chaucer の『哲学の慰め』と『カンタベリー物語』の Fragment A においては複合形が優勢であることが示されている。松瀬

(1989) は、Chaucer の散文 4 作品を対象とし、それら全てにおいて単純形の使用頻度が圧倒的に高い<sup>3</sup>ことを論じている。

これらの先行研究から、中英語後期の Chaucer の作品における単純形と複合形のそれぞれの頻度は、作品ごとに異なることがわかる。

## 2.2. 動詞の意味特性と統語的特徴の関連性

これまでの先行研究において、再帰動詞の意味に特徴がみられると指摘されている。Ogura (1989a: 1,13) は、再帰的に用いられる動詞を意味的観点から 13 に分類し、動作動詞、静止動詞、感情動詞が再帰動詞として機能しやすいことを明らかにしている。

Fischer (1992: 239-40) は、再帰動詞の機能と意味との関連性について、中英語において自動詞的に用いられる再帰動詞の中で、特に動作動詞が顕著にみられることを示している。

同じく Mustanoja (1960: 430-1) は、与格の再帰代名詞を伴う自動詞は、動作や感情を意味する動詞が多いことを指摘し、このような用法を reflexive dative と定義している。一方、動詞が他動詞で、対格を伴う場合を true reflexive verbs としている。しかし、中英語において上記の 2 つの用法を区別することが難しくなり、それを古英語後期から中英語初期にかけて生じた人称代名詞の格融合に起因すると指摘している。

寺山 (1997: 44) は、動詞の機能と再帰代名詞の形態との関連に関して、『カンタベリー物語』では、自動詞が単純形を、他動詞が複合形と共起しやすい傾向にあることを明らかにしている。

## 3. 『公爵夫人の書』と『鳥たちの議会』における再帰動詞

Chaucer によって書かれた『公爵夫人の書』と『鳥たちの議会』の 2 作品において、再帰動詞と共起し、再帰用法として機能する再帰代名詞の頻度<sup>4</sup>を以下に示す。

---

<sup>3</sup> 前置詞を伴う場合、あるいは主語や目的語の同格となる場合の強調用法については除外している。(松瀬 1989)

<sup>4</sup> 強調用法と前置詞を伴う用例については除外した。

表 1 2 作品における再帰代名詞の頻度

作品名	単純形	複合形	総数
『公爵夫人の書』	10	6	16
『鳥たちの議会』	12	3	15
総数	22 (71%)	9 (29%)	31

表 1 が示すように、Chaucer の両作品において、単純形が優勢であることが明らかになった。これは、松瀬 (1989) の Chaucer の散文作品を用いた結果と同様であり、韻文作品でも単純形の使用頻度が高いことがわかる。

### 3.1. 『公爵夫人の書』における再帰動詞

本節では、『公爵夫人の書』における再帰動詞の意味特性について、再帰代名詞の形態との関係から分析を行う。『公爵夫人の書』において、それぞれ単純形、複合形を伴う動詞を意味ごとに分類すると、以下のような特徴がみられる。まず、単純形の再帰代名詞を伴う動詞は、思考動詞と感情動詞に多くみられることがわかる。以下に、(i) 思考動詞、(ii) 感情動詞、(iii) *hie* の順で例を挙げる。

(i) 思考動詞

(3) And *bethenke me* every del (698)

(4) My firste song. Upon a day

I *bethoghte me* what woo

And sorwe that I suffred thoo (1182-4)

(5) So at the laste, soth to sayne,

I *bethoghte me* that Nature

Ne formed never in creature

So moche beaute, trewely (1194-7)

(6) *Remembre yow* of Socrates, (717)

(7) For whan that I *avise me* wel (697)

(ii) 感情動詞

(8) For ther was noon of hem that feyned

To synge, for ech of hem *hym peyned*

To fynde out mery crafty notes. (317-9)

(9) And I saw that, and gan *me aqueynte*

With hym, and fond hym so trefable, (532-3)

(10) “Shulde y now *repente me*

To love? Nay, certes, than were I wel (1116-7)

(iii) *hie*

(11) Goo now faste, and *hye the blyve!*” (152)

(12) Ther overtok y a gret route

Of huntres and eke of foresteres,

With many relays and lymeres,

And *hyed hem* to the forest faste (360-3)

(i) 思考動詞として、*bethink*, *remember*, *advise* を含む 5 例がみられた。また、(ii) 感情動詞としては、*acquaint*, *pain*, *repent* など 3 例、さらには、「急ぐ」を意味する (iii) *hie* という動詞が 2 例みられた。つまり、『公爵夫人の書』において、単純形の再帰代名詞を伴う動詞が 10 例あり、そのうち 8 例は思考動詞、感情動詞であることがわかる。2.2. で Ogura (1989a: 1,13) が指摘していたように、思考動詞と感情動詞が多いという結果となった。

次に、複合形の再帰代名詞を伴う用例に関して、6 例中 4 例が “killing” を意味する動詞<sup>5</sup>と共起した。それらの用例を以下に引用する。

(13) Thogh ye had lost the ferses twelve,  
And ye for sorwe *mordred yourselve*, (723-4)

(14) And Phyllis also for Demophoun  
*Heng hirsself* — so weylaway!— (728-9)

(15) Had Dydo, the quene eke of Cartage,  
That *slough hirsself* for Eneas (732-3)

(16) And for Dalida died Sampson,  
That *slough hymself* with a piler. (738-9)

これらの用例において、“killing” を意味する 3 つの動詞 *murder*, *hang*, *slay* がみられる。また、そのうち 3 例は主語として固有名詞を用いていることで共通している。

上の 3 つの動詞について OED を参照すると、他動詞として、あるいは他動詞的に使用される用例の中に再帰用法が用いられている。このことから、これらの動詞が他動詞としての特徴を強く有するゆえ、再帰代名詞として複合形を選択していることが考えられる。

### 3.2. 『鳥たちの議会』における再帰動詞

3.1. 同様に、再帰代名詞の形態と動詞の意味特性との関係について分析を行った。再帰用法として機能し、単純形の再帰代名詞を伴う再帰動詞の頻度は、12 例であった。<sup>6</sup> そのうち 8 例を意味的観点から、(i) 思考動詞、(ii) 感情動詞、(iii) 動作動詞、(iv) *speed*, *busy* に分類し、順に引用する。

---

<sup>5</sup> 残りの 2 例について、*awake*, *assay* がみられた。

<sup>6</sup> 他に *avaunt*, *bereave*, *dress*, *put* といった動詞がみられた。

(i) 思考動詞

(17) “Almyghty queen, unto this yer be don,  
I axe respit for to *avise me*, (647-8)

(ii) 感情動詞

(18) That he ne shulde *hym* in the world *delyte*. (66)

(19) But *dred the* not to come into this place, (157)

(20) A yer is nat so longe to endure,  
And ech of yow *peyne him* in his degre, (661-2)

(iii) 動作動詞

(21) And, but I *bere me* in hire servyse (459)

(22) But bet is that a wyghtes tonge reste  
Than *entermeten hym* of such doinge,  
of which he neyther rede can ne syngre. (514-6)

(iv) *speed, busy*

(23) Al open am I —passe in, and *sped thee* faste!” (133)

(24) With fynnes rede and skales sylver bryghte.  
On every bow the bryddes herde I syngre,  
With voys of aungel in here armonye;  
Some *besyede hem* here bryddes forth to bryngre; (189-92)

これらの用例から、(i) 思考動詞としての *advise* や、*delight, dread, pain* などの (ii) 感情動詞、*bear, entermete* を含む (iii) 動作動詞、「急ぐ」を意味する (iv) *speed, busy* などの動詞が収集された。動作動詞を除く 3 つの

動詞の意味群について、3.1.における単純形の再帰代名詞と共起する動詞の意味特性と共通している。

次に、複合形の再帰代名詞を伴う動詞は3例みられたが、これらの意味に共通点はみられなかった。また、『公爵夫人の書』において使用頻度の高い“killing”を意味する動詞も見られなかった。

#### 4. 『カンタベリー物語』における複合形と共起する動詞

3節でみたように Chaucer の2作品を対象とした調査の結果、再帰代名詞の単純形、複合形それぞれに動詞の意味の特性が顕著にみられることが明らかとなった。特に単純形を伴う動詞としては、2作品共に思考動詞や感情動詞の使用頻度が高かった。一方、複合形については『公爵夫人の書』においてのみ“killing”を意味する動詞の頻度が高かった。

複合形と共起する傾向のある動詞の意味についてさらに調査を進めるため、同じく Chaucer の『カンタベリー物語』における複合形の再帰代名詞とそれに伴う動詞に焦点を当て頻度調査を行った。『カンタベリー物語』において、複合形の再帰代名詞と共起している動詞は101例<sup>7</sup>みられ、それらの動詞のうち2回以上出現した動詞の頻度は、以下の通りであった。

表2 『カンタベリー物語』における再帰動詞の頻度

<i>slee</i>	<i>make</i>	<i>hurt</i>	<i>blame</i>	<i>bigyle</i>	<i>come</i>	<i>delivere</i>	<i>do</i>
18	5	3	2	2	2	2	2

<i>hange</i>	<i>helpe</i>	<i>holde</i>	<i>kepe</i>	<i>knowe</i>	<i>seye</i>	<i>wend</i>	<i>yeve</i>
2	2	2	2	2	2	2	2

表2が示すように、ほとんどの動詞が2例しか出現していない。しかし、“killing”を意味する *slee* は18回と圧倒的に多く出現することが分かる。先行研究においても、「殺す」を意味する動詞が複合形の代名詞と共起する

<sup>7</sup>この頻度には、同じ動詞が重複している。



傾向について言及がある。例えば保坂 (2005: 149) では、古英語において「殺す」を意味する再帰動詞が複合形を伴う傾向を示すことが指摘されている。また松瀬 (1989: 142) による Chaucer の散文を扱った研究においても、動詞 *slee* は複合形のみと共起することが論じられている。今回の『カンタベリー物語』を対象とした調査により、“killing”を意味する動詞 *slee* の使用頻度が、複合形と共起する動詞の中で最も高かった。<sup>8</sup>さらに、同様の結果が『公爵夫人の書』においても得られた。したがって、Chaucer の韻文においても“killing”を意味する動詞が複合形と共起する傾向にあるということが明らかとなった。

しかし、その他の意味を有する動詞にも注意を向ける必要がある。それらのうち使用頻度の高い動詞は、動作動詞、感情動詞、“injuring”を意味する動詞<sup>9</sup>であった。特に、複合形の再帰代名詞と共起する動詞のうち、動作動詞<sup>10</sup>は 8 例収集された。

このように、『カンタベリー物語』で収集された複合形と共起する動詞を意味機能により分類すると、動作動詞、感情動詞、“killing”、“injuring”を意味する動詞が複合形を伴う傾向にあることが明らかになった。また、それらの動詞の中で“killing”を意味する動詞、特に *slee* の生起頻度が高かった。

## 5. 結論

本研究では 14 世紀後半に書かれた Chaucer の夢物語 2 作品における再帰代名詞、またそれと共起する再帰動詞について分析を行った。2

---

<sup>8</sup> “killing”を意味する動詞として動詞 *slee* の他に、*destorye*, *brenne*, *hange*, *drenche*, *fordo* が収集された。

<sup>9</sup> 動作動詞として *come*, *wende*, *walk*, *ryde*, *ryse*, *strepe*、感情動詞として *drede*, *glade*, *wepe*, *love*, *pyne* が収集された。また“injuring”を意味する動詞については、*hurt*, *offend*, *anoye*, *beat*, *prike* がみられた。

<sup>10</sup> Visser (1963: §328) は主語と目的語が同じ人物を指す文においてその動詞が「動き」を意味している場合、その動詞は、主に自動詞として機能すると主張している。今回の『カンタベリー物語』を対象とした調査においても動作動詞 8 例のうち 7 例が自動詞として機能していた。

作品における再帰代名詞の頻度については、複合形よりも単純形の頻度が高い傾向があった。

また、再帰代名詞の形態と再帰動詞の意味との関連を考察した。『公爵夫人の書』において、単純形の再帰代名詞を伴う動詞に思考動詞や感情動詞が多く、複合形を伴う動詞に“killing”を意味する動詞の頻度が高かった。したがって、単純形、複合形といった再帰代名詞の選択が動詞の意味特性に関与していることを述べた。一方、『鳥たちの議会』においては、単純形を伴う動詞に同様の意味特徴があったものの、複合形にはみられなかった。

さらに複合形を伴う再帰動詞の意味特性を明らかにするため、同じく Chaucer によって書かれた『カンタベリー物語』においても調査を行った。その結果、複合形の再帰代名詞と動詞が共起している 101 例のうち、“killing”を意味する動詞の使用頻度が圧倒的に高いことが明らかとなった。したがって、この意味を有する動詞と複合形の再帰代名詞との関連があった。

本論文では、Chaucer の韻文における再帰代名詞の選択が動詞の意味特性に関与していることを論じた。

#### テキスト

Benson, Larry D. (ed.). 2008. *The Riverside Chaucer*. 3rd edition. Oxford: Oxford University Press.

#### 参考文献

- Brunner, Karl. 1973. *Die englische Sprache: Ihre geschichtliche Entwicklung*.  
Translated into Japanese by Tamotsu Matsunami, Shigeru Ono, Kinshiro  
Oshitari and Koichi Jin. Tokyo: Taishukan.
- Curme, George Oliver. 1931. *A grammar of the English language, vol. III: Syntax*.  
Boston: D.C. Heath & Co.
- Fischer, Olga. 1992. Syntax. In Norman Blake (ed.), *The Cambridge history of the  
English language, II: 1066-1476*, 207-408. Cambridge: Cambridge  
University Press.

- Mustanoja, Tauno Frans. 1960. *A Middle English syntax. Part I: Parts of speech*. Helsinki: Société Néophilologique.
- Oizumi, Akio. 1991. *A complete concordance to the works of Geoffrey Chaucer*. 4 vols. New York: Olms-Weidmann.
- Ogura, Michiko. 1989a. *Verbs with the reflexive pronoun and constructions with self in Old and Early Middle English*. Cambridge: D. S. Brewer.
- Ogura, Michiko. 1989b. Simple reflexives, compound reflexives, and compound forms of 'refl/non-refl pron + self' in Old and Middle English. *Studies in Medieval English Language and Literature* 4, 49-72.
- Simpson, John Andrew and Edmund Simon Christopher Weiner (eds.). 2009. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition, CD-ROM, ver. 4.0. Oxford: Oxford University Press.
- Visser, Frederik Theodor. 1963-73. *An historical syntax of the English language*. Leiden: E.J. Brill.
- 寺山裕子. 1997. 「カンタベリー物語における再帰代名詞:再帰用法について」『学習院大学英文学会誌』1996, 31-46.
- 保坂道雄. 2005. 「第6章 文法化と適応的言語進化—英語における再帰代名詞の発達をめぐって—」『文法化—新たな展開—』141-68. 東京: 英潮社.
- 松瀬憲司. 1989. 「チョーサーの散文における再帰詞について」『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』24, 135-49.